

除され、帯刀及び絹袖を着ることを許された。筆紙墨その他の費用はすべて管内から徴収した。

注(8) 各村に1名を置き、大村の場合はこれを数区に分けて各1名宛置かれた。肝入は肝煎とも書き、関東の名主、関西の庄屋に相当するものである。肝入は、中世郷村の自治的結合の中心だったもので、近世封建制成立の際、村落支配の手段に逆用されることになったものである。肝入の職務は極めて広汎で、年貢・諸役の割付・徴収・人別改〔戸籍調査〕・検地帳はじめ村方帳簿の作成保管・百姓条目の徹底・土木普請の具申・組頭以下の人事を専決し、村民の願届書には総て末書して申達した。肝入は自分の年貢以外の諸村役及び諸郡役を免除され、功労ある者は苗字帯刀を許され、更に知行を給される者もあった。肝入の事務処理に要する筆紙墨その他の費用は、総て村の負担とした。なお、手代を置く場合もあった。肝入は、有力な百姓の中から適任者を大肝入が代官に推薦し、代官によって任命された。多くは世襲であったが、寄合で選挙するところもあった。初期の肝入は村の名門・旧家で、曾て武士であった者が多かったが、中期以降は富裕な実力者がこれに代り、村民の信頼にそむくような肝入も現われてきた。

注(9) 宿駅に1人乃至2人置かれた。肝入と並んで地方では最も重要な職務で、主として伝馬関係の業務を取扱った。その任命等は肝入と同様の手続きで行われた。肝入が検断を兼務する場合もあった。

資料 宮城県史第2巻

仙台藩農政の研究（近世村落研究会編）

## 95 岡千仞の歿年は大正何年か

問 岡千仞の歿年を「仙台人名大辞書」は大正2年、平凡社の「大人名事典」は大正3年と書いています。どちらが正しいのですか。

答 岡千仞の歿年を、大正2年と記したものに次のものがあります。

「岡家系譜」（岡濯原編の第三伝写本）

「仙台市史」第7巻

「大日本人名辞書」（大日本人名辞書刊行会編）

「仙台人名大辞書」（菊田定郷）

「宮城県郷土史年表」重訂版（菊地勝之助）

「漢学者伝記及著述集覧」(小川貫道)

「宮城人」(朝日新聞仙台支局)

「大漢和辞典」巻4(諸橋轍次)

「宮城県文化史年表」(矢島玄亮)

「涌谷町史」下巻

大正3年歿とするものには、次の諸書があります。

「宮城県教育百年史」第1巻(宮城県教育委員会)

「仙台市史〔昭和4年刊〕」第1巻

「郷土人物伝」(宮城県教育会)

「大人名事典」(平凡社編)〔「新撰大人名事典」の縮刷合冊版〕

「日本人名大事典」(平凡社編)〔「新撰大人名事典」の復刻版〕

「仙台之学者」(中目 覚)

「明治初年の宮城教育」(宇野量介)

「白雲館文録」(岡 濯)

「白雲館詩鈔」(岡 濯)

「高橋本枝〔千仞の次男〕さんの回想録」(菅野義一、麓 肅編)

「日本儒学年表」(斯文会)

「芸文家墓所誌」(結城素明)

「幕末維新人名事典」(学芸書林)

「鹿門岡千仞の生涯」(宇野量介)

以上の二通り世に行われていますが、東京都目黒区中目黒三丁目祐天寺の「鹿門岡千仞墓」、仙台榴岡の「鹿門岡先生碑」(岡濯撰文)の碑文実査、並びに信頼度絶対の資料「白雲館文録」・「白雲館詩鈔」によって、大正3年2月18日歿であることが確認されます。このほか別の手がかりから検討を進めても、大正3年歿の結論が固められます。即ち歿年の干支〔えと〕甲寅〔きのえとら〕は大正3年に当りますし、天保4年〔1833〕11月2日生れで享年82才〔数え〕とありますので、歿年は大正3年〔1914〕でなければ不合理となります。<sup>(5)</sup>

なお、大正2年歿と記してある上掲「岡家系譜」は、千仞の生家である土樋の岡家〔当主広氏〕に保存されているものですが、原本は昭和9年12月に火災のため焼失してしまいました。現在のものは第三伝写本で、転々と書写が行われた過程で、数字の書き違いがあったものと認められます。大正2年歿と記してある諸書は、この「岡家系譜」に拠っているものようであります。

注(1) 漢学者。名は濯〔あらう〕、字は萬里、旧称嘉太夫、麿泉〔げいせん〕また白雲山房主人と号す。岡台輔の長子。経史詩文を叔父岡千仞に学んで造詣極めて深く、東京に遊学して学大いに進んだ。叔父千仞の文章で麿泉が代撰するものが多いとされる。帰郷後師範学校・

中学校等の漢学教員として子弟を教育した。明治17年、叔父千仞に従って清国に赴き、李中堂、愈曲園、王紫詮等一流の学者文人と交流を深めた。帰国後は健康に恵まれぬ状態が続いたが、益々詩文の研鑽に努め、永沼柏堂、大須賀筠軒〔いんけん〕、佐澤香雪等と白鷗吟社を起して後進を導き大いに詩文の興隆に尽した。著に「白雲館文録」「白雲館詩鈔」がある。昭和6年1月26日歿、享年79才、土樋松源寺に葬る。岡家の当主広氏はその第三子である。〔広氏は昭和52年5月19日歿〕。

注(2) 東京都目黒区にある浄土宗の寺。明顕山善久院と号。享保年間名僧祐天〔増上寺第36世、大僧正、紫衣〕隠栖の遺跡に弟子祐海が開創、祐天を追請開山とした。芝区三田北寺町17〔現港区三田四丁目1番〕宝生院に「岡千仞墓」があって、よく間違えられるが、この岡千仞は、同姓同名の別人〔軍人、伊豫久松出身、陸軍少佐、大正7年11月18日歿〕である。「大人名事典」(昭和28年平凡社)、「関八州名墓誌」(大正15、時山弥八郎)、「掃苔録」(昭和15初版、48年再版、藤浪和子)、「日本人名大事典」(昭和12の「新撰大人名辞典」を昭和54復刻改題、平凡社)等にはそのように誤まり記されているので注意すべきである。「芸文家墓所誌」(昭和28初版、昭和52復刻、結城素明)、「鹿門岡千仞の生涯」(昭和50、宇野量介)等には正しく祐天寺と明記されている。

注(3) 榴岡宮城県図書館前の広場に大正15年建てられたもので、碑高1丈3尺、横4尺4寸、撰文と書は岡濯である。碑文は岡千仞の履歴を伝えるもので、次の通りである。

『鹿門岡先生碑銘 荊州楊守敬題額(晩歳猶存鉄石心) 姪岡濯撰文并書 鹿門先生歿之十年門下諸子属濯譔碑銘濯於先生親為叔姪義則師弟受教四十年略知其出处大節不可以不文辞焉先生諱千仞字振元鹿門其号初名修字天爵称啓輔岡氏台山人考諱衛之妣佐藤氏少学藩校弱冠游江戸入昌平校専修經史学為舎長与重野成斎中村敬字藤野海南松本奎堂松林飯山交尤厚会米艦来浦賀海内騷然先生西游与奎堂飯山同寓浪華河野鉄兜書贈雙松岡三字一時喧伝志士来集日夜論天下形勢為幕吏所指目奎堂去糾合同志飯山西婦先生亦游説公卿間藩命東帰為養賢堂指南役新賜食禄築鹿門山下而居焉戊辰正月伏見變起幕軍東走朝廷命我藩討会津先生蹶起曰千載一時請速出兵藩論依違不決已而奥羽鎮撫総督九条道孝率兵東下陣岩沼藩公至白石進兵迫会津松平容保遣使因我公謝罪公与米沢上杉齊憲至岩沼疏陳督府不聽各藩使臣会盟白石遂戕(ころす)官軍參謀世良修蔵相与举兵時先生探常警諸藩情状至水戸聞之大驚馳至福島則形勢一變賊焰猖獗先生激昂論大義而無容焉者慨然賦長歌而去奉母氏逃於本吉山内耕烟邑密与参政三好清房謀奉一門族請討会先鋒時藩兵連敗官軍迫国疆清房為賊所劫自刃先生亦被縛臨斃与耕煙訣飲耕煙作画先生贊之投筆而下仙台獄已而藩論反正先生見赦挙於讓堂公子侍読兼參機務開麟經堂講春秋左伝以明大義名分藩人始知所向云当此時藩封削減士卒失禄人心洶洶先生建言擬泰西法開議事局議定扶助方法士卒始安庚午春拜大学助教移家東京旁聞

私塾大學廩為東京府學教授先生知西學之不可不講經史以外取格物入門万国公法等書講之與河野通之高橋弘識述米法國誌府學廩任修史館協修後補東京圖書館長以疾辭之自此不復仕甲申春西航至上海周覽蘇杭諸勝過燕京登八達嶺縱觀万里長城拜十三陵抵廣東瘴癘志半而歸此游見俞曲園張濂亭李少荃又訪彭雪琴張香濤論經術文章大有所益先生談及東亞大勢極論善鄰之誼且說吸煙科舉消耗国力之甚皆服其說言至李少荃修禮請留寓當時名聲之籍籍可以知也後漫游海內北自北海西極西海沖繩所至搜勝地名跡叙述前人逸事善聞名日游乘積成數百卷又為從游諸子創如蘭社至老誘掖不倦甲寅二月十八日終於大崎邸壽八十有二葬於日黑祐天寺先是

今上以皇儲巡遊東北召先生賜謁於伊達伯爵邸其病革也特旨叙從五位先生為人剛毅廉潔以文章為生命其文暢達明快驅使万卷專以氣行之外祖父畑中荷沢為一藩碩儒先生自幼毅然期以一代文學其將瞑也顧左右曰吾於道終始一貫俯仰無所愧實如其言矣所著尊攘紀事米國誌法國誌觀光紀游藏名山房文集研癖齋詩鈔藏名山房雜著行於世未刊者數百卷皆藏於家配河野氏學四男二女長百世承祀次本枝冒高橋氏次碩人次猛夫二女都子珠子銘曰

奧羽雄鎮	蔚青葉城	竜蟠虎踞	斯生雋英	大政維新	六師東征
討會命下	拳藩震驚	先生蹶地	仗義論爭	名節凜然	有死無生
檄書應徵	出就學職	一朝勇退	文章報國	遠航漢土	交遍朝野
日東文豪	西儒虛左	不朽者文	何必拖紫	千歲之下	聞風而起

大正十五歲在丙寅夏六月 菊地硯山刻』

注(4) 同書の中に、次の「祭鹿門先生文」がある。

『大正三年甲寅二月歲叔鹿門先生罹疾大崎邸事達天聽特旨叙從五位越一日溘然長逝矣報至仙台姪濯驚愕失措仰天而哭焉既而掃堂安靈位獻香華具野蔬園菓俯伏稽顙以進祭辭焉伏惟先生於天保初就學藩齋毅然期以古人西游入昌平校訂交一時俊秀諸老先生目為後生可畏幕府末造尊攘之說風動天下先生游京撰與各藩志士往復唱大義干說二三公卿會藩命東歸講經君前擢藩學教授伏見變起將軍東走朝廷勅我藩討會津先生謂千載一時上書請速出兵而執政老臣不達事休以為一二雄藩擁幼冲天子之所為藩論沸騰遂至合奧羽各藩抗衡王師先生慷慨悲憤叩當路論爭曰可使吾公蒙賊名乎當路以為沮害藩論捕縛投獄當是時先生命在旦夕而議論諤諤毫不忌憚眾服其義胆矣既而藩論反正上下恭順先生出獄舉於讓堂公侍讀兼參藩務時封土減封一万臣士俄失秩祿物情洵洵先生獻議擬西法開議事局會通世務之士三十人討論三日定扶助方法其不至再亂者先生之力也先生更請一巨第開麟經學館曰我藩誤方向者坐於講學不得其道耳乞教者千百先生坐講堂講春秋左丘以明大義名分之所在聽者欽服焉應徵入京拜大學教授轉史館協修著尊攘紀事叙述中興續末親者皆謂文章議論不在賴氏下矣先生既絕意仕途益欲致力斯文携著書數百卷航海拳漢土游北自燕蘇南窮廣東足跡万里名聲喧伝曲園濂亭諸儒虛左禮之李中堂先生萬言大策使人請留不聽登万里長城拜十三陵入燕京訂交諸名士將溯長江探武昌漢口之勝罹疾東歸靜養年餘而鬱勃之氣不能自已每歲載筆硯事游歷北海南島四國九州無不至之地至則尋古墟名迹

訪義人烈士之後隨得隨録名曰游乘晚為從游諸子創如蘭社砥励文章名節才学之士彬彬輩出焉先生為人剛正廉潔不欲枉已逢世是以其在官沉滯下僚其在野栖栖南北而毫不介意益發憤勵精旅館之夕寒燈之下兀兀不止其所記述積成數百卷卓論宏議以鼓舞世道人心学殖名望上達於九重下施於海内天下仰為学海泰斗文壇老将者良有以也嗚呼先生逝矣吾輩小子自今其從誰講斯文生死訣別幽明隔絶彼蒼蒼者天此悲豈有窮極哉濯於先生親為叔姪義為師弟受教數十年海岳恩大而卑才驚鈍涓滴不報奄遭大故而病軀羸弱不能西馳上堂慟哭尽哀遺憾曷止矣謹修祭儀叙学行之大以為祭梓』

注(5) 「仙台風藻」(今泉篁洲編)に記されている。

注(6) 『啓輔 先生幼啓輔ト号シ後修字ハ天爵ト改メ維新後更ニ千仞字振衣ト改ム仙台米ヶ囊邸ニ生ル叔父鹿門先生ノ号ヲ襲ヒ鹿門ト号ス幼石沢二水翁及養賢堂ニ学ブ弱冠西上昌平校ニ入り四方俊才ト交リ才名籍〔甚〕ニ居ル数年舎長ニ擢ラル時ニ米国使節軍艦數隻ヲ率ヘ浦賀ニ来リ互市ヲ強請ス志士憤慨開鎖ノ論大ニ興ル先生京撰ニ游ビ飯山奎堂諸士ト一社ヲ設ケ四方志士ト交リ形勢ノ帰着スル所ヲ知り状ヲ藩ニ報ズ已ニシテ命アリ東帰シ経ヲ君前ニ講ズ養賢堂学問方御用仰付切米三両御扶持方四人ヲ賜リタルハ慶応二年八月十四日ナリ依テ始メテ一家ヲ興シ宗家宅背小丘佳矚ノ地ヲトシ書亭ヲ構ヘ一斎先生鹿門精舎ノ四字ヲ書贈シ別ニ飯山成斎ヲシテ草私史亭ノ字ヲ書セシメ之ヲ掲グ自ラ亭記ヲ撰ビ修史ヲ以テ自ラ任ジ亭下一室来塾者常ニ數人ヲ置ク既ニシテ戊辰役興ル朝廷我藩ニ勅シテ会津ヲ討タシム先生謂フ是レ千歳一時大ニ当路者ニ懲慙シ而シテ滿廷大半賊説先生大ニ論争既ニシテ九条公奥羽鎮撫使トシテ薩長筑三藩兵ヲ率ヘテ東下シ一藩爾然兵ヲ進メテ会津国境ニ迫ル藩公自ラ白石ニ陣ス時ニ賊論蜂起シ米沢公白石ニ至リ両君面議奥羽同盟ヲ約シ官軍參謀世良修蔵ヲ福島ニ殺シ相応ジテ官兵ニ抗シ先生口ヲ極メテ其ノ非ヲ論争賊徒之ヲ惡ミ刃ヲ以テ之ニ擬スルニ至ル先生為ス可ラザルヲ知り職ヲ辞シ歸郷母堂及家眷ヲ携ヘ入谷ニ逃ル此時藩兵連戦連敗官軍国境ニ迫ル賊党窳窮正義派ノ間ニ乗ゼンコトヲ恐レ急ニ之ヲ勸絶〔そうぜつ〕セントス三好清房其郷ニ自殺ス先生亦捕フル所トナリ入仙入獄ス既ニシテ藩論及正先生赦ス所トナリ挙ゲラレテ藩政ニ参与ス時ニ封土減縮士庶処ヲ失フ人心恟然当路為ス所ヲ知ラズ先生建議西方ニ倣ヒ議事局ヲ建テ主トシテ臣士扶助法ヲ講ジ百般藩政ヲ議ス当時再乱ニ至ラザルモノハ一ニ先生ノ力也先生別ニ巨第ヲ請ヒテ麟經堂ヲ興ス以為ラク我大藩ヲ以テ大義名分ヲ誤ル者ハ学制其方ヲ得ザルニ依ル是ニ於テ一藩翕然教ヲ請フ者數百人既ニシテ召ス所トナリ出京大学中助教ヲ拜シ家ヲ東京ニ移シ下谷練堀町ニ開塾シ来学者日ニ多シ塾舎狹隘ヲ告グ幾許モナク大学廢校先生東京府学校ニ補セラル校赤坂区岸和田藩邸ナリ時ニ東京始メテ小学ヲ數所ニ置ク此校ヲ以テ中学ニ充ツ華族子弟幕〔臣〕子弟多ク之ニ入ル先生家ヲ愛宕下仙台邸ニ移シ盛ニ書生ヲ養フ別ニ外塾ヲ設クルニ至ル四年春府学烏有ニ帰シ尋テ廢校ニ帰ス先生太政官編輯官ニ任ジ維新事蹟ヲ担当ス此ニアル數年眼疾ニ罹リ官

ヲ辞シ専ラ静養出テ書籍館長トナル而シテ其ノ意ニアラズ幾ナラズ之ヲ辞ス之ヨリ筆硯ヲ携ヘテ四方ニ歴游ス閩東南越四国九州奥羽北海至ラザルノ地ナシ十七年春姪濯ヲ携ヘテ支那ニ游ブ初メ上海ニ至ル王紫詮東道主トナル蘇州ニ至リ俞曲園ヲ見夫ヨリ会稽ヲ過ギ禹廟ヲ拝シ蘭亭ヲ訪ネ杭州ニ至リ西湖ニ游ビ慈谿ニ留ル数月天童山ヨリ寧波ニ游ブ西湖々畔一寺ニ留リ一夏ヲ消ス時清仏戦正ニ酣ナリ匆々上海ニ航シ更ニ北航シ天津ニ李鴻章ヲ見北京ニ至リ翰林諸士ノ待遇スル所ト為ル西山諸勝ヲ探リ八達嶺ニ上リ十三廟ヲ拝シ遂ニ保定ニ至リ張廉亭ヲ見天津ニ出デ上海ニ帰リ再度南航香港広東ニ至リ張之洵ヲ見ントス時軍務匆忙見ル能ハズ広東寒暑激変風土上国ト同ジカラズ加フルニ食物適セズ病ノ侵ス所トナル暴熱激発苦悶累日清医ノ療ヲ受ク而シテ復セズ護シテ上海ニ至リ英医ノ治ニ就ク殆ド危殆ニ瀕シ此ニアル一月ヨリ四月ニ至ル小快ニ至リ一帆東帰ス此行為メニ長江入蜀ノ游ヲ達セザルヲ恨ム東京ニ至ルニ再ビ神経痛ニ苦メラレ増上寺山内ニ移転治療シ回復後塾舎ヲ閉鎖シ再度筆硯歴游到ル所驪材〔べつざい〕山ヲ為ス晩年老衰ヲ以テ家人ノ止ムル所トナリ又出デ宅ヲ新銭座ニ求メテ之ニ移ル如蘭社ヲ創始シ文詩唱酬以テ老ヲ娛ム新銭座市塵ノ地ナルヲ以テ更ニ地ヲ大崎ニ求メ書楼ヲ新築ス此地高燥閑雅且ツ眺望ニ富ミ以テ大ニ喜ビト居二十首ヲ賦シ諸子ノ和ヲ求ム大正二〔ママ〕<sup>×××</sup>年<sup>×</sup>二月十八日病ヲ以テ家ニ令終ス行年八十二日黒祐天寺ニ葬ル之ヨリ先四十一年今上天皇〔大正天皇〕東宮ヲ以テ奥羽ヲ巡遊セラルルヤ先生仙台ノ先儒ヲ以テ伊達邸ニ謁ヲ賜ハル此ニ至リテ危篤ノ報天間ニ達シ特ニ從五位ヲ賜ハル光栄ト謂フベシ漢学老儒ヲ以テ位階ヲ賜ルモノハ前キニ小野湖山一人アルノミ先生十有五始メテ学ニ志シ自ラ期スルニ日東大儒ヲ以テ身ヲ立ツルヲ以テス其ノ正ニ瞑セントスルヤ顧ミテ曰ク吾レ終始一貫天地ニ愧ル所ナシト果シテ其言ノ如シ其ノ著ス所尊攘紀事米法二史蔵名山房雜著硯集集觀光游記詩文集數十卷各県游乘等諸著蓋シ數百卷ヲ下ラズ著書ノ多キ古今其比ヲ見ズ名声ノ中外ニ喑々〔さくさく〕タル者誠ニ故アルナリ先生河野氏ヲ娶ル即チ荃汀先生ノ妹ナリ四男二女ヲ挙グ』

資料 仙台市史〔昭和4年刊〕第1卷

郷土人物伝（宮城県教育会）

大人名事典（平凡社編）

仙台之学者（中目 覚）

明治初年の宮城教育（宇野量介）

白雲館文録（岡 濯）

白雲館詩鈔（岡 濯）

高橋本枝さんの回想録（菅野義一、麓 肅編）

鹿門岡千仞の生涯（宇野量介）